

トップ > 医療・健康

医療健康 西日本新聞

|| コラム・聴診記(医療班から)

思いを語るということ

[更新日時]2010年02月15日

大切な人を自死で亡くした人たちが悲嘆を分かち合う九州初の遺族会「リメンバー福岡」が発足する一と朝刊の1面トップで報じたのは2004年9月だった。自殺者が年3万人を超すことが社会問題となるなか、周囲の目から身を潜め、悲しみや苦しみを語る場所もない遺族たちに心を痛めた市民有志がボランティアとして始めた。

記事が出て問い合わせが相次いでいます、と代表の井上久美子さんから報告を受けて喜んだが、3年後、1人の女性から「私の夫はあの記事が出た日に亡くなりました」と打ち明けられ衝撃を受けた。最期のときを過ごしたリビングの机に朝刊が残っていたという。

こんな会ができるよと私に伝えてくれたのでしょうかと言ってくれたものの、思い詰めていたご主人の背中を記事が押ししめたのではないかという思いもする。不特定多数に向けて情報を発信するメディアの原罪かもしれないが、掲載がなぜあの日だったのか、1面トップという目立つ扱いにする必要があったのかといまも自問する。

もっとも、どうすれば死なずにすんだのかという問いを遺族は持ち続けている。リメンバー福岡の5周年を記念して先週7日にあった講演会でも、登壇した2人は、年月を経ても整理できない胸の内をしばり出すように声にした。

乳飲み子を遺(のこ)して妻が逝った男性は、あなたが悪いのだという周囲の言葉に自分を保てなくなり、妻を憎いとさえ思ってしまったことを振り返った。でもこうした感情は一般の人には言えません、誤解を招きますからと言った。

テーマは「語れる自殺 語れない自殺」だった。井上さんがあいさつしたように、必ずしも語る必要はないが、語れない状況であってはならないという投げかけである。つまり誰もが心の嘆きを打ち明けられる社会こそ、遺族、犯罪被害者、高齢者や障害者、ひいては私たちが生きやすい世の中になるというのがパネリストたちの提唱だった。

終わっての懇親会で、ビールを飲んだ井上さんが的を射た。「生きやすい社会っていうけれど、社会っていったい何なのよ」。要するに私たち一人一人が共感できるか、ということなのだ。

(編集委員・田川大介)

＝2010/02/15付 西日本新聞朝刊＝